

2024年10月

## プラスチックの開発物語書評

岩井 薫生

発明・発見には偶然の出来事・ひらめきが語られることが多い。例えば紙は蜂の巣がヒントになったとか、ノーベル化学賞を受賞した白川英樹がポリアセチレンの重合を行うときに触媒を「m」の文字に気が付かずに1000倍にしてしまったら膜が出来ていたとかである。

合成樹脂の世界でも同じようなことが語られていて合成ゴムの研究を行っていたグッドイヤーが誤って試験片をストーブに接してしまったところ炭化したとか、セルロイドがコロジオンを落として出来たなどである。

これらの話は一部事実、一部虚構である。しかし大切なのはここからで偶然の出来事・ひらめきを見逃さず研究・努力を続けた姿勢にこそ評価されるものである。

高山森著、「舞台裏から観たプラスチックの開発物語」は、まさに舞台裏から観ているために、これまで語られてきたような表面的な話を極力排除して事実を主役として虚構を出来るだけ削るという姿勢を貫いている。この著作の最後に著者自身が女神の訪れ・細かい観察力の勝利、普段の問題意識が招く成功、経営者の決断力、尊敬に値する上司などのほうが声高に叫ばれるべきものである。

この姿勢を貫いている筆者は、セルロイドについてもコロジオンに触れてはいるが問題点があったことや、樟脳との出会いも違った形で書かれている。

他の合成樹脂に対しても同じで表面的なことを避けて裏面から観た生々しさ、人間臭さを感じさせる内容となっている。

所々に現れる「脱線」と称する裏話は現場にいたものならでの生々しさを感じさせて興味深い内容となっていて、何時の間にかひきこまれていく。

そして裏から観ていながら表の部分も引き出している筆力には感心させられるばかりである。

この力作を合成樹脂の関係者は勿論の事、一般の人々、これから化学を学ぶ人たちに勧めたい。

舞台裏から観たプラスチックの開発物語 高山 森 著

スペクトラ・フォーラム社 Takayama Library 発行 255ページ

[Spectrf-2@wish.ocn.ne.jp](mailto:Spectrf-2@wish.ocn.ne.jp) [s-tkym@kph.biglobe.ne.jp](mailto:s-tkym@kph.biglobe.ne.jp)